

松村通信第71号

2009年10月10日
(10月16日補正)
松村勝弘

日本語が亡びるとき

勉強不足 この歳になって、定年を前にしてつくづく勉強不足を感じる。「遅い」と言われるだろう。でも、実際そう思う。とりわけ、最近役職が忙しくて、自分の専門に関わる本をじっくり読んでいる暇がない。そこで、その間隙を埋めようとして、自分の専門外のものも軽く読めそうなものを中心に読んでいる。専門外の本を読もうという、ある種の「諦観」というか「ゆとり」というか、そういうものが専門外の本を読ませる原動力になっているのかも知れない。しかし、こんなことを知らなかったのか、こんな本が出ていたのか、などと気がついて、愕然とする。直近、ショッキングな本を読んだ。水村美苗『日本語が亡びるとき - 英語の世紀の中で』筑摩書房、2008年、というのがそれだ。専門外の本でもある程度そうだろうと以前から思っていた本の場合、驚きはそんなに大きくない。ところが、この本の場合、驚きが大きかった。

国語は歴史的所産 要は、「国語」なるものが歴史的所産であるということを説得的に論じられている。国語はもともとあったものではなく、形成されてきたものだというわけである。日本で江戸時代までは、それらしきものはあったとはいえ、「国語」はなかった。ヨーロッパ諸国においても、「国語」が成立するのは近代に入ってからであるという。日頃、当たり前のように思っていたことを根本から覆してくれている。部分的にはよく知っていたこともあるが、とてもショッキングな内容を含んでいた。「国語」が亡びるかも知れないという「恐怖感」を懐かせられる。「国語」が亡びるとき、それは日本という従来常

識的にあると思っていた日本という国民国家が亡びることかも知れないと思うとき、「恐怖感」を懐かざるを得ない。ある部分、その兆候が現れ、それを実感させられているからこそ、「恐怖感」を懐くわけである。

漢文の時代から国語の時代へ といっても、この本で述べられていることを一言で語ることは難しい。言葉には<普遍語> <書き言葉>と<母語> <現地語> <話し言葉>とがあるという。江戸時代までの日本では<普遍語>は漢文であったという。公文書は漢文で書かれていた。もちろん、ひらがなやカタカナがすでに生まれていて、漢字仮名交じり文も普及していたが、公用語は漢文であったという。それが明治の国民国家成立とともに国語が形成されたという。国語は「国民国家の国民が自分たちの言葉だと思っている言葉」を指すものとし、<国民国家>という概念が近代的な概念であるように、<国語>という概念も近代的な概念である(105頁)。このように言われている。

ヨーロッパでは、ラテン語やフランス語などが<普遍語>でそれ以外がローカルな言葉<現地語>であった時代が続いたが、国民国家成立とともに、国語が形成されていった。中東ではアラビア語が<普遍語>であった。それが国民国家成立とともに、各国で国語が形成されたいった。国語としては各国の言葉は平等な関係であった。

普遍語としての英語の時代へ それが近年のグローバル化、インターネットの時代へという流れの中で、英語が国際的な<普遍語>の位置を占めるようになり、日本語(日本語に限らず、ドイツ語、フランス語などなども)は<母語> <現地語> <話し言葉>の地位へと落ち込んでいきそうな気配である。英

語のみが国際語としての地位を固めつつある。もはや不可逆的な流れとなっている。

とはいえ、各国の国語でしか表現できない分野もあるはずであると著者は考えている。文学、小説がそれである。しかし、著者も意識していると思うが、英語一辺倒になっていくと、小説だけでなく、社会科学などでも問題が出てくると思われる。英語では掬いきれない問題は問題意識から外れてしまい、解かれるべき難題が解決されなくなっていくと思われる。最近のグローバル資本主義、金融資本主義の時代に、英語的画一的理解で推し進められた結果もたらされた困難というものもあつたのではないかと思われる。グローバル資本主義のもとでは、しばしば経済至上主義に陥りがちである。そこでは、中心国の利害から物事が考えられ、周辺国、周辺地域、ローカルな問題が捨て置かれることになりがちではないか。社会科学者である私の場合、この『日本語が亡びるとき』を読んで、わが田に水を引き、日本のローカルな民が捨ておかれる経済至上主義の時代と普遍語としての英語一辺倒の時代とをオーバーラップして理解してしまう。

合理的経済人モデルや分析的学問の限界

経済学が想定している人間は、よく「合理的経済人」とされると言われる。かつてのマルクス主義の時代であれば、「範疇としての資本家」が想定されている。そのような理解の限界を指摘する向きも増えてきている。最近読んだ、タレブ『ブラック・スワン』(上・下)ダイヤモンド社、2009年にしても、セイラー+サンステーン『実践行動経済学』日経BP社、にしても合理的経済人モデルの限界を克服しようとしている。そういう経済学の限界を認識するとき、経営学の地平が見えてくるように思う。

従来の西欧的社会科学はしばしば、分析的であるといわれる。日本では結構総合的に物事を見る向きもあるが、欧米では分析一辺倒であるように思う。日本でも輸入学問は分析的である。近代経済学でもマルクス経済学で

もそうだ。日本の経営学者、野中郁次郎氏などが「暗黙知」などを提唱するとき、いくら分析していても分からない問題が、ずっと分かってしまう場合があることを暗示している。このような考え方が出てくるのは、日本的東洋的だと思う。木を見て森を見ざる過ちなど西欧的分析的志向で考えると陥りがちである。

理性の限界 今日「キリスト教やマルクス主義といった精神的・文化的一元的価値が崩壊し、思想・価値観の多元化が進んできた。絶対というものはなくなったという、ポスト・モダンといわれる状況である。」「精神的・文化的一元的価値の崩壊は、ほぼ、人間の理性に対する過度の信頼の末の問題である。一方、新たな経済的・制度的一元的価値すなわち競争原理も、……アトム(原子)的個人観、効率至上にもとづくもので、やはり人間の理性(合理性)への無反省な信頼にもとづくものである。要は、人間の理性への過信が、今日の種種の問題を生みだしているといえよう。人間の理性への信頼の過程を近代化といえれば、現代は近代化のもたらした種種の矛盾が噴出している時代だと言える」(竹村牧男『入門哲学としての仏教』講談社、2009年、242,243頁)。こういう主張に共感するところ大である。

普遍語としての英語の時代は滔々と進展していくと見なければならぬ。他方で、そこにはらまれている問題も見据えておかなければならぬ。それとともに、人間の傲慢を自覚しなければならぬ。最近の環境問題への積極性は評価すべきだと思うけれども、人間の業を考えると、一筋縄では解決できない問題だと考えねばなるまい。このところ、そんないろんなことを考えさせられている。

HPを見て下さい。又何でも意見を。

皆様のご意見を歓迎します。HP (<http://www.finance.ritsumei.ac.jp/matsumura/>) もご覧下さい。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい (matsumura@mba.ritsumei.ac.jp)。